

## 「雨と蛙」

細道

2010/07/10

ある日出かけようと外に出て、干からびた蛙を見つけた。

「……………」

何かを言いかけた唇を閉ざす。

そもそも今は一人なのだ。声に出す意味を感じなかったし、ふと口を開いた一瞬後にはもう、言葉は呼吸と共に消えてしまった。

吐き出す息さえうだるような、蒸し暑さ。

蛙はびくりとも動かない。

僕はふと日差しを仰いで、額の汗を指でぬぐった。

眩しさに目を細める。

雲ひとつ見つけられない、青過ぎるような色だった。

ざあざあと降り続く雨が、帰る気力を萎えさせた。

芭蕉さんの家でのことだ。

傘はある。家を出たときから降っていたから。ただしその時にはまだ細く静かな雨だった。ごねる師にしぶしぶ茶を用意し、話に付き合っているうちに勢いを増した。

叩きつけるように降る雨に、道はぬかるみ水溜りに塞がれる。

傘では足元までは防げない。

いざとなったら泊まっていきなよ、という台詞は黙殺した。素知らぬ振りで湯呑みを持ち上げ、ぬるまった茶をすすする。

不貞腐れたように芭蕉さんは、両手を上げて畳の上にひっくり返った。

そのままごろごろ転がり、縁側の方へ移動する。

そこで顎を両手で支えて、ぱた、ぱた、と両足を遊ばせて外を見出した。すでに興味は僕にないらしい。結構だ。構われて、鬱陶しいよりはましな状態だ。

僕も外を見る。

首をひねって、落ちてくる雨の筋を眺めた。雨に打たれる草花も。そういえば近頃庭に手を入れていない。連日の雨の

ためか、雑草が勢いよく伸びていた。荒れ放題と言えば聞こえは悪いが、生命力溢れると言い換えれば、これはこれでいいような気がする。野趣に富んでいるとか、要は言い方と意識一つだ。

庭の端の池だって、なんだか良いもののように見えてくる。そこそこ深くて大きめの水溜り、という認識を改めよう。藻の繁殖が早く手が掛かる面倒な代物という認識も。

今は、いくつもの輪を生んでは乱して忙しい。変化は不規則で、見ていると知らずに意識を奪われている。

珍しく殊勝にも大人しい、芭蕉さんと二人分の沈黙を冷めた茶とともに味わった。

僕は庭の池を見据えて、あの時の蛙はどうなっただろうかと考えた。

この雨は蛙のせいだろうか。

そもそもあの蛙はまだ生きていたのか、死んでいたのか。

判別つかないままに拾い上げ、この庭の池に放り投げたのはつい先日だ。

死んでいたなら、怒りを買っただろうか。

生きていたなら、感謝だろうか。

そこまで考えてそういえば、乱暴に水面に叩き付けてしまったことを思い出した。

別に乱暴にするつもりがあった訳ではない。手から滑り落ちたとき、水柱が僅か立っただけだ。それでももう少し丁寧に、例えば蛙を乗せた手を水につければよかったかもしれないなんて、思いついたのが遅かった。

生きていても、恨まれているかもしれない。慣れない親切などするべきではないと溜め息を吐く。

気付けば、庭の外を見ていたはずの芭蕉さんがこちらを振り向いていた。

「……………何か」

驚きを無表情で押し殺して、語尾に苛立ちを滲ませた。

びくりと肩が跳ねて、芭蕉さんの視線がさまよった。

それでも強く睨みつけると、諦めたように溜め息を吐かれる。

「いや、ちよつと思っただけど曾良君って、」

口元をうつすら持ち上げて、溜め息に溶かすような呟きが落ちた。

「……………雨、みたいだよねえ」

惚けたような間の後にじわじわと、しかめられていく表情を見てやっぱり言わなきや良かったって思った。

曾良君は怒った顔をしている。もしくは難しい顔。悩んでいる顔。

ひよっとして少し、困ったような顔。

「……………何を言ってるんですか。呆けましたか？ 遺言はすべて僕の名前でお願います」

「さりと何言っちゃってるのこの子！？ 呆けから急に老衰なの！？」

「今晚が峠かと」

「何の話！？」

たん、と。

一際大きく響いたのは、曾良君が湯呑みを叩きつけるように置いた音だった。

思わずびくりと体が反応する。

言いかけた言葉を失くしてしまった。

もしかしたらその湯呑みが、次の瞬間には眉間にぶち当たるんじゃないかって、そんな予感が頭を占める。

はつきりとそんな光景を描いてしまつて、慌てて頭を腕でかばつた。

縮こまっていたら、溜め息の音が聞こえてきた。

「何やってんですか。発作ですか。医者呼ばないんで自力で行ってください」

「だから何でさつきから病人扱いなんだよ！ しかも扱いがひどすぎる医者ぐらいちやんと呼んでよ！」

「茶を淹れ直してきます」

「人の話を聞けーい！」

曾良君が湯呑みを持つ手を掲げたのでまた縮こまる。

足音が遠くに行つたので、恐る恐る顔を上げた。

曾良君はもういなかった。つくえの上には何もなかった。

曾良君の湯呑みだけじゃなくて私の分も。

おや、と意外に思つて、次にはもう嬉しくなつてしまう。

またばたと仰向けに転がつて、がんばつてちよつと顎を仰げ反らせて、雨を見た。

真っ直ぐ落ちてくる。覆い尽くす雲は黒くて濃い灰色で、重たそう。

あんまりにも重くなっちゃうと落ちちゃうから、だから雲はこうやって、軽くなるうと一生懸命だ。

灰色の雲なら雨を。

黒い雲は雷を。

向こうの空から近づいてくるから、きっとそのうち、雷が見れる。

音に驚くのも、ぱっと光が走るのも、どちらも好きだから楽しんだ。

身を竦めたくなる音を早く聞きたいと思う。

思わず鼻歌が漏れてしまった。雨の日は割と気分がいい。心の奥がもぞもぞと、何かを期待して楽しくなる。嬉しくなる。

何より雨だと、曾良君が帰らないでいてくれる。

「雨みたいだと思ったんだよ」

目を閉じると水音が意識を塗りつぶした。

曾良君の顔が思い浮かんだ。

迷惑そうな顔。仏頂面。不機嫌顔。

怒ると、逆に表情が消えるから余計に怖いだよね。

でもこれも雷と一緒に。嫌いじゃない。

何よりその性格が雨に似てると思う。

穏やかな時もある。今日みたいに、地面を叩きつける雨もある。

それでもその本質は同じ。

雨は、天から降る恵みだ。

曾良君だって同じ。

穏やかな時もある。怒ってる時も不機嫌な時もある。

でも本質はいつでも変わらない。

今日みたいに。今みたいに。

「まったく……いつまでそうやって、ぐうたら過ごすつもりですか」

すぐ上の方から声が降ってきた。

言葉とは裏腹に、呆れたように、柔らかな音だった。

それこそ、雨みたいに。

曾良君の本質はいつも変わらない。

何も言わないで、私にも茶を用意してくれるような優しさと同じだ。

「飲ませて差し上げましょうか？」

「待って、待って待って！ その高さから？ 熱々を？」

「熱々を」

それにしても曾良君の言うことは一々過激でいけないと思う。冗談なのか本気なのかわからない。

わからないけれど、本気にされても困るのでいつでも全力で拒否しなければならぬ。

私は慌てて体を起こして、曾良君の少なくとも腕の届く範囲から避難した。

その気になれば投げつけてくるだけだから、距離なんて全然防衛にならないんだけど。

それくらいなら私にだってわかる。だから座布団とか、何か壁に出来そうなものを探してあたふたする私に、曾良君があからさまに大きな溜め息を吐いた。

「座りなさい。落ち着きのない」

誰のせいだよとか、言ってやりたかったけど怖かったから止めて、怖々座布団の上に戻った。

ことりと、うっすら湯気の立つ、湯呑みが目の前に置かれた。

湯気が薄かったから大丈夫かと思っただけ。

だからすぐに口を付けたら、意外なことに火傷した。痛かった。

「うぐおおおお………」

曾良君に横目で睨まれて、慌てて口を押さえて黙った。

涙目だったと思う。だって、相当熱かった。痛かった。

「まったく………とことごとく、期待を裏切らない人ですね」

「ううう………」

「どこですか？ 見せてみなさい」

「え？ えっと」

ここ、と言ったつもりだったけど、変な音になった。

べろを出したまんま喋ったからかもしれない。

ぴくり、曾良君の眉毛が跳ね上がる。

それから曾良君がこつちににじり寄って来たから、慌てて口を閉じてしまった。

「見えませんよ。どこですか」

「んん、んん」

「何を言っているんですか………」

口を押さえたまま、ぶんぶんと首を振る。

近い。曾良君が、すごく近い。

手のひら一つ分くらい。

思わず仰け反ったけど、その分曾良君が近づいてくるから、それから両手が塞がって支えるものがなかったから。

そのまま、後ろにひっくり返ってしまった。  
頭打った。また、痛い。

「何やってるんですか？」

「何してんの！」

ひっくり返った姿勢に対して曾良君が言っているのであれば、そんなの、曾良君のせいに決まっていた。

覆い被さるように、両手を顔の脇につかれて動けない。  
抜け出せない。

「師が火傷したというので、心配しているのですよ」

そんなことを涼しい顔で、飄々と言ってくるのが憎たらしい。

いつもは進んで傷やら打撲やらを作ってくるのは曾良君だ  
つて言うのに。

「いいって！ もう大丈夫、ほらこんなにピンピンしてるから！」

「じゃあ、確認してもいいでしょう？」

また何も言えなくなつて、口を押さえてぶんぶんと、頭を振った。

今度は指一本分くらいのところ、曾良君の顔があつたか

ら。

ものすごい近い距離で見つめ合う。

私は泣きそうだけど曾良君が何思つてんのかぜんぜんわかんない。

この状況をどうにかしてほしいけどどうしたらいいかわかんない。

どんどん曾良君から不機嫌オーラが出てくるし。  
もう泣きたい。

と、そこに。

ゲコ、と。

緊張の糸を、ぱつさりと断ち切るような、気の抜ける音が。

私は転がったまま首をひねつて、曾良君は両手をついたまま顔を上げて、多分、同じところを見た。

縁側の縁の方。庇が浅くて濡れている部分。

緑色の、一匹の蛙がこつちを見ていた。

一瞬、曾良君と見つめ合う。

いち、にい、さん、

曾良君が短く息を吐いて、どきりと私の隣に腰を下ろす。

私は一生懸命起き上がって、曾良君の隣に座り込んだ。

二人してしばらく縁側の蛙を見た。

蛙は雨粒が落ちてくる度に、そっち側の目を瞑る。

けろけろとうつつすら鳴き声をさせながら、喉の所が動いて

いる。

ぱちぱちと目を、片方ずつ閉じている。

一回、二回、三回、四回、

ふは、と。

私の口から、息が漏れた。

「何か、恨みでもあるんですか」

「何か、恨まれるようなことでもしたの？」

「まさか」

言い切って、曾良君がこちらを向く。

すっと手が伸びてきてびっくりしたけれども、その手はた

だ私の尻尻を引っ張るみたいに押してそのまま、ほっぺたに

触れているだけだった。

正直なところちゅー、されるとか、思ったんだけど。

柔らかな溜め息を吐いただけで曾良君は、それ以上何もし

てくれなかった。

「もしも僕が雨ならば……………」

じわり、手のひらがあつたかい。

何だか、のどが渇くような気分になる。

「あなたは、何になつてくれますか」

「……………ええ、つと」

本当は、色々なことを考えたのだ。

雲。雷。空。傘。草。池。

蛙、とか。

「……………わかんないや」

曾良君はもう、不機嫌そうでも怒つてもなかった。  
少し困ったみたいだった。

でも、言うのは止めておいた。

雨みたいだなんて、言わなければ良かったって思った。  
曾良君は、曾良君だ。

そして私は私として、この子のそばにいたい気がする。

「ねえ、曾良君」

「何ですか」

「手、どかそうよ」

「何ですか？」

「……………つな、んか。緊張するじゃん」

「そうですか？」

「そうだよ！」

本当はこのまま、ちゅー、してほしいとか。

思ったけど、やつぱり、言えない。

「喉渴いた動きたいし……………」

「動けばいいじゃないですか。何もしていませんよ」

「つ、つねったりとか」

「しませんよ」

勝手にどうぞ、と曾良君は、空いた方の手のひらをかざしてみせる。

ううう、と唸って睨んだ曾良君は、いつの間にか楽しそう

に目を細めて私を見ていた。

か、と一気に顔が熱くなった気がする。

からかわれてるんだって、思ったら腹立たしいんだか泣きたいんだか情けないんだか、訳が分からなくなってしまうた。

「……………あんたは、どうしてほしいですか？」

つまり曾良君は、私に言わせたいのだ。

何も言わずにしてくれたらいいのに。

精一杯力を込めて睨んでみても、曾良君は素知らぬ顔。

ただ、手のひらをほつぺたに当ててるだけで。

ちらりと縁側を見た。蛙はまだ、そこにいる。

こちらの気なんかお構いなしに、香気にけるける、喉を鳴らして雨に濡れて。

あのまま、邪魔されなかったら良かったのかもしれない、  
何て。

今じゃ私の方が蛙を恨みたい気持ちでいっぱい、もう一度、往生際悪く私は唸った。

まだまだ自分、このほつぺたの手のひらから、離れることは出来そうにない。



「鈍く苦く、  
ぬるく甘く」

あの世

2010/07/02

定期的に姿を見せなくなる人を、探して歩くのが日課になってしまった。

一週間に一度が三日に一度になり、それが連日になり、最終的には四、五日に一度に落ち着いた。

とはいってもそれは定期的にはない。平均すると、だいたいそれくらいになるといっただの目安だ。連日でないこともなることもある。半月、放浪がなくなることもある。

そのタイミングは未だわからない。何らかの法則やルールがありそうに思えるけれども、未だそのルールを解さない僕はいつも彼がいなくなってから、今日がその日かと知ることになる。

僕なりに考えて設定した、巡回ルートを一週り歩く。一周して見つからないなら行き違いや見落としを考慮してもう一周。

それでも会えないのであれば、もう、僕にできることは何

もない。

きつと見つからないだろうという悲観と。  
きつと、帰ってきてほしいという、楽観。  
違う、これは、きつと。

「あれ、何、まだいたの」

「……………もらいたい判子があつたものですから」

刺さるように冷たい言葉。違う、ただ、素っ気ないだけ。何も考えてない、思っていないだけ。

その無関心さが鋭く感じられるだけ。

これは、僕側の問題だ。

「ここ、です」

「うわあー、君、よく見つけるねーこんな細かい不備」

こんなの、誰も見ないのにね。

つまらなそうに、いや違う、何も感じてなさそうに、なんのためらいもこだわりもなく、大王は僕の示した箇所を修正

を入れた。

これで今日の分の書類は完成だろう。

他の書類といっしょにまとめて、机の上で角をそろえる。とんとんと、思ったよりもその音は響いた。

「で、なに、これだけのために、君はここにいたってわけだ？」

「これだけって」

「こんな訂正、別に、今日じゃなくても構わない。違う？明日、直せばよかったんじゃないかな」

それなのに君ったらまだこんなところにいる。

言われても、ろくに残業代も出せないよ。

……………ちがう。

僕がほしいのとはそんなものじゃない。

僕が本当に求めていたのは判子とか、そんなものでは断じて、ない。

「……………」

それでも本音を語ることはむずかしい。

嘘を吐くことはできない。何せ相手は閻魔王。どこまで嘘に厳しいのか、試したことはないが試そうとも思わない。

だから判子を待っていたのは嘘ではない。本当のこと。ただし、それがすべてではない、というだけで。

「僕の勝手にすから」

せめてもの抵抗は、全てを語らないことに尽きる。

嘘は言わず、核心を語らず。

そんな僕の強がりをも、大王はふうんという呟きで片付けた。

僕は彼を理解できない。

そして同じように彼は、僕を理解しない。

どこかにいなくなってしまう彼を、追いかけて、探し出して、付き従うことは難しい。

それでも最後にはここに帰ってくる。

どんなに姿を消したとしても、本当に消えてしまうわけではない。いなくなってしまうわけではない。

そんな楽観。

……………ちがう。

これは、きつと願いなのだ。

確かなかたちの、僕の望み。

帰ってきてほしい、彼のいる場所は、僕と同じであってほしい。

そんな、叶うかどうかもわからない、拙い願いをもうずっと。ずつと、ずつと。繰り返して僕は探し続けている。

今のところ僕の願いは裏切られてはいない。

それでも、これがいつまで続くかなんて、そんなこと、誰にもわかるはずもないのだ。

この先のことは判るはずもない。

相手は閻魔大王なのだ。

先の時間を見通せるとすればこの人であって、僕ではない。

……………だけど。

「じゃあ、勝手にすればー？」

書類の訂正が終わったというのに、大王は席を立とうとはしなかった。

四本足の椅子、その前二本を浮かせて、後ろ二本だけでゆらゆらと、バランスをとって遊んでいた。

ひかれるように、書類をめくる手を止めて大王を見る。

ここからじや顔が見えない。斜め後ろの位置。

ほんのすこし、帽子がずれているのがわかった。耳の形がよく見えた。

顔は見えない。

声がすねていることなんて、何も見えなくてもわかるのに。

書類をまとめる手を止めて、部屋を出た。

何も言わない僕の後ろで、やたら重々しい音で、扉が閉まった。

僕はささやかな願掛けを今日も、実行することにした。

定期的に姿を見せなくなる人を探すのが、すでに日課になっていた。しまった。

彼が寄越すのは温度のない言葉。無味乾燥で突き放すように聞える会話。

ただし、最近気付いたことがある。

彼はいつでもこんな風に、素っ気無いわけではないのだ。

まるで子供の不機嫌のようにも見えるその淡泊さ、冷淡さは決まって、僕が、彼を見つけれなかったときに見られる反応だと、最近になってようやく、気付いた。

あまり僕が彼を見つけれないことが原因のひとつかもしれない。

だから気付けなかった、だけなのかもしれない。

だって見つけれられたときは、こうではないのだ。

むしろ機嫌が良さそうに、浮かれたように、笑う。

僕の小言をまぜつかえすような、聞いていないような、関連のない話題が次々とその口から後び出してくる。

素っ気なくない。つまらなそうでもない。

だからもしかししたら、僕が彼を見つけれ出せないのが、原因なんじゃないかって。

いた。

もしもまだ、大王が部屋にいてくれたなら。

待っていてくれたなら。

僕の願掛けは今日もまた、叶う。

「起きてください。……………飲めますか？」

「ん……………」

とろりと眠たげにすわった半目。への字にひん曲がった不機嫌そうな口元。

控えめに肩を揺すると現れたその表情に、吹き出してしまいたいそうになるのをこらえて鼻先に、持ってきたマグカップを差し出してやった。

中身はコーヒー。砂糖はひとつ、ミルクは冷たいものを、カップに半分。

ちようどいい甘さと温度を知っていた。僕の手にはもうひとつカップがあるけれど、おんなじコーヒーにもかかわらず、それよりもはるかに丁寧に、気を遣って味をととのえてあるものだ。

この人の好きな味を知っている。

ふわり、立ち上る香りにひくりと、目を閉じて大王が鼻をひくつかせた。

「……………飲む」

再び部屋に帰ってきたとき、大王は、机に突っ伏して寝て

不機嫌そうな声が僕の手からカップを奪った。  
僕は少し離れた自分の席、大王の斜め後ろの椅子に座って  
コーヒーを飲んだ。

熱い液体が喉を滑り落ちていく、胃の腑を焼く、その感覚  
に癒される。

ふう、と息を吐き出せば、それは思いがけず溜め息みたい  
な重さだった。

彼がわずかに僕を振り向いたのが見えた。

相変わらず体は机に向いたまま、首をひねって、顔を横に  
向けて。

カップにつけたままの口から、ふ、と息を吐き出して。

「君は本当に、コーヒーを入れるのだけは得意だよねえ」

……………かくれんぼは、下手くそなのに。

驚いて目を瞬かせた。

そんなことを、言われたのは初めてだったから。

そんなことを本当に、言葉にされるとは思ってもいなかっ  
たからだ。

僕の願掛けは今日も叶う。

今日の願掛けは、いつも以上の望みを、叶える。

「……………それってどういう」

慌てて僕が立ち上がりかけたときにはもうすでに、彼はこ  
ちらを向いていなかった。

まるで幻でも見せられた心地で、呆然としてしまった僕の  
耳にまた、声が届く。

「今日も一日、ご苦労様」

気が付けばいつの間にかふうわりと、湯気も見えない温度  
の香りが、部屋の中に広がっていた。

ぬるいコーヒーを飲んでる人の耳たぶが、ほんのりと赤  
くなっていた。

## 「檻の中の腕」

あの世

2010/07/10

この部屋には、彼の嘆きが詰まっている。  
そんなことを考えて、むずがるように動く、胸元の頭をまた抱え込んだ。

「やだ、やだやだよもう……………なんで、どうして私ばかりこんな目に遭うの……………?」

いやだ、いやだと何度も繰り返す上司の頭を抱きこんで、  
いやだと呟く度に撫でてやった。

衣の胸元にぬるく染みる熱が心地好い。耳を打つ力ない嘆きに癒される。

肺いっぱい空気を感じ込んだ。  
どこまでも沈んでいけそうなくらい、悲しみに湿った空気があった。

「私はただ、大切な人と、いつしよにいたい、だけなのに」

どうしてそれだけのことが叶わないんだ。所詮、冥府の番人、死者の王と、祭り上げられて押し付けられて、働かされるだけなんだ。ただそれだけの存在なんだ、と。

魂の奴隷、という言葉をよくこの人は使う。  
どんな気持ちで言っているのだろうかなんて、僕に理解できるとも思っていないけれど。

「……………行かないで」

行っちゃいや。

拙く動く唇に触れて、子供騙しみたいな、どこまでも優しいだけの口付けを与えて額を合わせた。

もちろんこれで彼が救われるなんて、欠片も思っていないけれども。

蜘蛛の糸だと思う。細すぎて救えない。非力すぎて、救えない。

この人の悲しみは深すぎて救われない。

僕にできるのはただ、こうしてこうやって、いっしょに抱いてあげることだけだ。

それだって、もしかしたら。

この人を追いつめるだけかもしれないけれど。

「君に残されているのは、寿命なんかじゃないんだよ」

必要なのは罪を贖うだけの時間であると。

「君はいい子だから、きつとすぐに終わってしまう。君はいい子だから、……だから、」

最後は、かすれて聞き取ることができなかった。

僕の言葉を、彼はこれっぽっちも信じられないようだった。僕はまだ死ぬつもりはない。

この人を手放す気もない。大人しく消えてやるくらいなら、意地でも留まり続けてやろうと思うのに。

彼は僕の言葉を信じない。

僕の思いを伝えても、頭を振って嘆くだけだ。

「君は何もわかってない」

涙に滲む声で詰られた。

泣くなよ、と思った。

同時にもっと泣けばいいと思った。

腕の力を強くすれば同じだけ、必死にすがりつく掌をこの上なく尊く思う。

目を閉じてあなたの嘆きを聴いた。鼻から深く匂いを吸い込む。満ち満ちた悲しみに深く微笑んだ。

あなたが僕のこと泣くのがたまらない。

偉大な存在であるはずのあなたが、こんなちっぽけである僕のために涙を流すという。

こんな馬鹿げた話があるだろうか。

こんなにも、愛しい話があるだろうか。  
知らない。そんな物語は聞いたこともない。  
聞かせる気もない。

他の誰にも知らせない。嘆くあなたを部屋に閉じ込める。  
閉じこもるのはあなただけど、腕の中に、困って放さないの  
は僕の意味だ。

このまま囚われていてくれたらいいと思う。  
このまま閉じて、二人きりで、終わっていく物語ならその  
方が。

「大王」

呼んで、顔を上げさせた。

自然に体が離れた分だけ、あなたを見つめることが出来る。  
抱きしめるのも好きだけれども、顔が見れないのは歯がゆ  
いのだ。

ぼろぼろと目尻から伝う筋がいくつもいくつも。

捧げられる雫を尊いものだと信じ込んで、ゆるく指先で掬  
い取った。

そっと舌先をそわせると、甘く痺れる味がした。

うっとり、笑う。

ゆつくりと、近づく。

痺れるような悲しみを、分け合うような口付けを交わした。  
やわく舌を絡ませて、慰めるように撫でていく。

先立つ僕は今日もあなたを囚われにする。

やさしく慰める振りをして、癒されているのは僕の方だ。

僕は微笑む。やさしく深く、愚かに酷く。

残されるあなたを抱きしめながら、心を奈落の底に突き落  
とすのだ。

もっと、悲しんでください。

もっと、嘆いて見せてください。

僕のために。

僕を、忘れてくれないように。



## 「花に冠」

飛鳥

2010/07/02

と。

いずれ枯れる。

必ず失せる。

しかし足下で咲き乱れる花々に、そんな儂さを見つけるのは難しい。

そんな未来から目をそらしたくなるくらい眩しい日差しの下で、からからと太子が言い放った。

「摂政命令！！」

太子が、この間の指輪の代わりに冠がほしいとか言い出した。

「かぶってんじゃないですか」

「違うよ！　こんなのじゃなくて」

この間の、とはあの花のか。ちらりと薬指を見てしまった。

当然もう、ない。

花は枯れてしまう。

いずれ失せてしまう。

あんたの指の噛み痕が、一日と経たず消えたように。

言おうとして躊躇う。

一瞬の合間を縫って太子は言い切る。

花の。

こうして仕方なく、僕の花冠制作が始まったのだった。

黙々と手を動かしながら、どうしてこんなことしてるのかな、とか思ってみた。

太子を連れ戻しに来たはずなのに。

仕事しろって、怒鳴りつけてやる気だったのに。

「魔法みたいだな」

胡座をかいて草むらの真ん中。群生するクローバーに、混じって咲くのは白く丸い花。膝の上には太子が摘んできた、そんな花たちが散らばっている。

太子は寝そべって、両方のひじでをあげ支えて、僕の作業をじつと見ている。

ばた、ばた、と足が交互に揺れる。

あまりにも平和すぎるから。

自分自身に言い分けて、あまり上手とも言えない冠をひとつこしらえることに集中した。

じゃあプレゼント交換なー。

天気がいいせいだからいやに上機嫌な太子がそんなことを言つて、かぶっていた冠をとった。

ん、と頭を下げて、何かを待つような姿勢になる。

交換という意味が分からないまま、その何もない頭の上に出来たばかりの拙い冠を載せてやった。

太子は冠ごと、頭をべたべたと触って、やがて満足したのかだらしく笑う。

にんまりと、唇が曲線になって、目が細くなる。

嫌な予感はずぶんと、その顔が悪ふぎの前兆だと経験からわかつていたからだ。

「ちよ、ちよっと！」

「うはは、似合う、似合うよ、ぶぶぶぶ」

「ちつとも思ってたねーだろー！！」

ぼす、と。

頭の上の感触に一瞬で察しがついて、本気で血の気が引くかと思つた。

無造作に僕に載せられた色は、この国で最も尊い色。

思わず泣きそうになった。それぐらい驚いたという意味だ。嫌な意味で。

ただでさえ僕はいろいろなところから煙たがられていたりするのだった。ある程度は仕方ないと割り切ったとしても、その、火元は極力少なくしたい。

その僕の小心を、軽々飛び越しやがって。

コノヤロウ。

徳、を意味する色だとか。

そんな。

「なんだよ、いいじゃんちよつとくらい調子に乗れば。お前なんか一生こんな機会ないかもよ。もつと楽しめつて！」

「楽しめるか」 どうやって楽しめつていうんだよちよ、投げろぞ、これ！」

「失くしたら妹子がやったつて馬子さんに言うもん」

冠を掴もうとした腕が中途半端な高さで固まった。

よくよく考えればそんな太子の戯れ言を馬子様がまともに取り合うとも思えなかったが、そのときの僕は動転して、そんな簡単なことにさえ気付けなかった。

とることのできない頭の上の重みを、泣きそうな気持ちで感じながら、今ここに誰も来ませんようにと、祈ることしか出来そうにない。

よつぽど情けない顔でもしていたのだろう。

取つてくださいいと、訴える僕に朗らかに笑つて、太子は白の冠をかぶつたままさつさと遠くに逃げてしまふ。

「大丈夫だつて！」

何が、だよ！

風が吹き抜ける。少し冠が浮かび上がる気配。

それでも触れることすらためらつて結局、肩をすくめて風が収まるのを待つた。

思わず目までつむつていた。開いたときにはもう、遠くのほうではしやぐ多分太子の、人影が何となく確認できるだけだ。

走り回っているように動く、人影に叫ぼうとしてその気力も失せてしまふ。

ため息をついて肩を落とした。しぶしぶその場に座り込んだ。

なんとなく居心地が悪かった。どう考えても頭の上のものせいだ。何となく畏まつて身を縮めて、膝を抱えた。

ぱつひよーい、とか、なんかさういう、気の抜けた声が風に乗つて聞こえてくるけれども。

あの馬鹿、後で覚えてろよ、と心ので呟いた。

そうやって太子を恨みながらも、頭のどこか別の場所では、また別のことを考えていた。

この人の背負うものはきつと、僕の頭の上に載せられたものに象徴されるけれども。

もつと大きくてもつと重い。

ため息が出た。

疲れたような心地で、そのままうとうとと眠たくなつてく

る。

眩しい日差しのせいかもしれない。あたたかかった。風が吹くからちよいどいい。

臉が重たい。だんだんと、頭が下がる。

重たいのかもしれない。頭の上が。

だからこんなにうつむきたくなる。

うとうとと。

太子のはしゃいぐ声が遠くに聞こえて、ああもう、ケガとかするなよ、と思っただのがたぶん最後だった。

が隣で寝転んでいた。

ぴくりと体が震えた。一度だけ。

気付かれないようにそろそろと、静かに長く息を吐き出し、てまず息を整える。

同じ姿勢でいたからか体がこわばっているようだ。

関節とか、どことなくぎこちない感じがする。

「起きた？」

太子は寝てはいなかった。開いたままの瞳が動いて見据えられた。

僕どれくらい寝ていましたか、と。

聞けばさあね、と笑われた。

太子が体を起こした。

手が伸ばされて、何となく身構えて固まってしまふ。

首をすくめて、目を閉じてしまった。何を恐れたのだろう。

自覚するより早く、ふつと頭が軽くなった。

ようやくいつも通りに、呼吸が出来るようになった心地がした。

気が楽だ。

太子は僕から取り返した冠をまた、いつものように頭に載せていた。

僕の頭の上には代わりに、いびつな白い輪の冠が載せられた。

目をさましたときには、遠くで走り回っていたはずの太子

いる。

「さっきのもいいけど、でもやつぱり、妹子はこっちの方がかわいいな！」

その評価は不服だったはずなのになぜか腹が立たなかった。あまりにも真っ直ぐに太子が笑ったからかもしれないし、僕自身、同じことを思ってしまったからかもしれない。

僕にこの人の冠は似合わない。それならまだ、その辺に咲く花の方が、よっぽど相応しいのだろう、と。

僕にはそんな大きなもの、背負うことすら難しい。

それでも僕はその紫色を、背負うあなたのそばにいたい。そばにいたいと、思うから。

「お？」

「やつぱり……………」

僕は花の冠を、もう一度、今度は冠の上から太子に載せて頷いた。

その紫を背負えるのは、僕が知る限りあんなだけだ。でも僕にとつてのあなたは、穏やかに咲く野の花も、似合つてほしいと思うから。

「あなたの方が、お似合いですよ」

皮肉と、願いと、本心と。

複雑な胸の内を押しつけるようにそう決めつけて、不思議そうに僕を見る、あなたの視線を受け止めた。

## 「花の環送り」

飛鳥

2010/07/04

はずい、心底はずい。

「小野様はずいぶん仲良しなのですわ」

絶句した。その間にも変なボディータックかましてくる馬鹿は片手であしらう。

言い訳を考えるうちに、くすくすと軽やかな笑い声を立てて彼女は曲がり角に消えてしまった。

頭痛がしてきそうな脱力感にうんざりした。

いやに浮かれた様子の太子が小走りに駆け寄ってきたので、あまりの気持ち悪さに思わず叩き伏せてしまった。

「何すんだよ!」

「なよつとすんな!」

女々しい座り方でしくしく言われてもうざい。心底うざい。

「う……………その目つき傷つくんだけど」

「いつも通りですよ」

「嘘だ! いつつももつと優しいもん」

「現実を見ろ!」

ぎゃあぎゃあ言い争ってれば、そばを通りがかった女官に笑われてしまった。

「お、お? どうした妹子、ようやく私の妹子村建設に協力する気になってくれたか?」

「そんな話してた覚えありませんよ!」

「そうだっけ? じゃあ私なんの話してたの?」

「してないよ!!」

用件すら言っていないのだ、この馬鹿は。それでどうして話の内容がわかるというのだろうか。

僕のこの徒労感をどうしてくれよう。

「そうだよ、私、妹子に用事があつたんだよ!」

「用事がないのに僕の前に姿を見せたのなら、叩きつぶすところでした」

「叩き!? 何でそんなにバイオレンスなんだよ……………」

テンション高いなー、なんだなんだ、それは若さか？とか何とか。言っている太子のとなりで。

実は僕にとつて太子は魅力的すぎて、見ると暴力を振るわずにはいられないんです。

とか、なんとか。

空回りする頭脳がそんな台詞をはじき出したとしても、もちろん口には出さないのだった。僕は黙っていた。

偉いぞ僕の自制心。こいつ、冗談を冗談と気づかない危険性もあるから。判断が的確かつ賢明だった。

そんな自画自賛を練り広げていたりして。

そんな間に、太子はゴソゴソとポケットの中をまさぐっている。

「妹子になー、見せたいものあつて」

じゃん、と。

太子が差し出したのは一輪の花だった。

色は白。

名前は知らない。

ポケットに入っていたためか、少し痛んだ花びらが下を向いていた。

気にした様子はなく、太子はにこにこ僕に手を伸ばしてくる。

「妹子、手、貸して」

そう言ったくせに太子は僕なんかぜんぜん待たないで、体の脇にぶら下げたまんだった左手を、勝手につかんで持ち上げた。

問答無用か。僕の意志は無視か。

とりあえず、したいようにさせてみる。

「こないだの仕返し」

太子はそう、意味の分からないことを言う。

花の細いしなやかな茎が僕の指に絡みついた。

花びらが指にふれてくすぐったい。

左手の薬指に、白色の痛んだ花が飾られる。

「私はな、これくらいやわいほうが好きだよ」

まじまじと手を眺めていれば、ぎゅーっと太子に手を握られた。

視線を上げれば、今度はそれからにへらと、気の抜けただらしない感じの笑い顔だ。

「でもうれしかったから。あげるお前にも」

ぎゅーっと、手を掴まれて。

ゆびわ。

ぎゅーっと、手を掴まれて。

湿った手のひらだ。いつも通りの温度と湿度。体温は僕の  
ほうが上。いつもそう。冷たく湿った手のひら。ああもう、  
手汗とか、ほんと、ない。

ないと思うのに。

「そうですか。……………そうですか」

「そうだよ」

主語なしの会話、実は、僕は特に何も考えていない。

目の前の笑顔と花びらを、どうしたらいいのか考えるつもりもない。

掴まれた手を、振り払うつもりも実は、ない。

さあーって、今日も遊ぶぞ。

なんて太子が言って、手を繋いだまま引つ張られた。

一瞬体勢を崩すけれどもすぐに立て直す。

も、ってなんですか。も、って。

こいつ昨日も仕事してないのか。思ったけれども沸き上がったのは苛立ちでなく諦めみたいな何かで、それはもしかすると優しさとか、言い換えても間違いじゃないかもしれない。

ため息でごまかして何も言わなかった。

下手に何かを言うとかいつをつけあがらせる気がする。

冗談を、冗談と気づかないようなやつだ、こいつは。

僕にも仕事はあった。今日中に終わらせた方がいいんだろ  
うな。でも、別に今日じゃないといけないわけじゃない。

本当は今日じゃないと手遅れなことなんて、滅多にあるも  
んじゃないんだ。

明日でもいいことなら、明日だつていいじゃないか。

珍しく投げやりに面倒くさがる思考。それから有無を言わ  
せずに僕を導く手のひらに、今日この先の時間全部を預けて  
しまう。

そのつもりでため息をつく。

太子曰く、指に巻きついたやわい輪を眺めた。

今にも萎れてしまいそうな花だけど、なんだか途方もなく  
大切なものに思えてくる。しおれ気味に下を向く花びら、そ  
れを素直にきれいだと思えたからそう、呟いた。

「んんー？　なんか言ったか？」

「このアホ偉人仕事しろ」

「この馬鹿部下仕事しろ！」

「叩きつぶす！」



きやーっ、とはしゃいだ悲鳴が響きわたった。

## 「指に環戯れ」

飛鳥

2010/07/10

こたつを挟んで反対側、肩まで布団を引き上げてぬくぬくと眠たそうにする太子を眺めながら、僕もひたすらだらけていた。

太子の提案で始めたしりとりは早々に打ち切りになつてしまった。曰く僕のやり口が気に食わないらしい。失礼な、作戦と言ってもらいたい。

「あ、あ、……………赤！」

「蚊」

「か、か？ え？」

「蚊ですよ、蚊。夏ごろに蚊取り線香焚くでしよう？」

「ああ、蚊ね、蚊……………えーつと、じゃあかかし！」

「詩」

「し、し！？ なんだよお前さつきから！ 真面目にやれよもう！」

「太子こそ。僕はこんなに真面目にやってるじゃないですか。しかも太子を待たせないように、これでも即答を心がけています。少しは僕の努力をくんでください」

「え？ そうだったの？ じゃ、じゃあえつと……………、し、し、し……………しじみ！」

「実。果物とかの、食べる所です」

「みかん！」

「……………」

「……………」

こんな調子で。

引つかかる方が悪いし、それを打破できないのも悪いと僕は思うのだけれど。

それつきり太子は黙りこくつてしまつて先ほどから会話がなかった。僕からも特に話すこともなく、だからだと静かな時間が過ぎていく。お互い肩まで潜り込んでこたつの熱を享受する。へそを曲げているのかと思つて太子の様子を伺えばこくりこくりと頭が揺れていて、なんだ、ただ眠たいだけなんじゃないか。僕はコタツの上に直に頭をのせて横を向いた。じーつと、低くうなるこたつの音がずっと変わらずに、安心する。

とくとくとと耳元で流れる血液の音も聞こえてきそうなくらい静かだった。

休日の昼間だ。昼ご飯も済ませてしまつて適度な空腹に眠気も募る。今なら仕事をしると太子を怒鳴る必要もなく、僕

だつて午後の作業の順番について、頭を悩ませる必要もないのだ。ひたすらだらけていたとしても誰にも迷惑はかからない。ああなんて素晴らしいのだろう。いつそ一生休日でもいいのに。そしたら僕は、仕事をさぼる太子を苦勞して探さなくとも良くなるのだ。

「……………いや、ないな。それは、ない」

「なんか言った？」

「なんにも」

太子の声がして、もぞりと動く音がした。つられてこたつ布団が引つ張られた。引つ張られた分だけ引つ張り返すと少しだけ抵抗がある。どうやら寝てはいなかったらしい。ずつと静かで大人しかったからてつきり夢の中だと思つた。

こうも長時間、太子が大人しいのは珍しくて、それはそれで素晴らしいことだ。太子らしくないと言えたらしくもないけど、でも別に悪いことじゃない。ゆつくりと時間を過ごせる、これに勝ることはない。

わずかな感動を胸にじつと太子を見つめてみたら、もぞりと動いた太子も顔をこちらに向けた。あごをこたつの上のせて、じつと僕を見つめた後におもむろに手を伸ばしてきた。今までこたつの中に隠れていた手のひらはとてもあたたかい。

「妹子、顔冷たい」

「そりや、顔はコタツに入れませんか」

「入れればいいんじゃないか？ 私文句言わないぞ」

「いやですよ、息苦しそうだし、臭そうだし」

「そうだな、むせ返るほどのハーブ臭がするかもしれない。くらからするぞ。あまりの芳しさに妹子がぶつ倒れちゃつたらまずいもんな」

「はあ。つつこむのも面倒なんでスルーでもいいですか？ じゃあ太子がコタツに入ればいいじゃないですか」

「妹子の足つてカレーのにおいする？ ちよつとかじつてもいい？」

「蹴り飛ばしますけどいいですよ」

「よくないよ」

僕もこたつから手を引き抜いて、ペタペタと遠慮なく顔中撫で回してくる手のひらを捕まえた。こたつの熱のせいかもしれないもより汗つぽい気がするし、いつもこれくらい手汗がひどい気もする。まあ、要するにどちらでもいいってことなんだけど。もう慣れた。

そのまま握りしめようとしたら逃げるようにじゃれついてきた。どつちなんだよ。引くのか寄るのか、動きが見えない少しムキになった。読めない動きでぬるりぬるりと逃げる手を何とかまた掴んで握りこむ。指の間に指をすり付けるようにすると、くすぐったそうにやっぱり逃げられる。無理矢理に何とか引き留めて、しっかりと手のひらを合わせた。

太子を見ると、目が笑っていた。なのに口元だけはムカつ

くような澄まし顔だ。からかうような視線に取り繕った余裕が分かりやすく浮いている。

だから僕はそれを崩してやりたくなる。

僕だつて挑発するように笑みを作つて、捕まえた手を引き寄せて指先に唇を寄せてみた。押しつけるように口付けたまま視線だけを動かして太子を見る。太子の表情はまだ変わらない。相変わらずからかうように僕を見ている。挑むように取り澄ました余裕。上等だ。何かを期待されている気がしたから次は舌を差し出す。ちろりと、爪の間をなぞるように舐めてみる。

「ん……………」

ぴくりと、中指が分かりやすく揺れた。かすかに太子がため息を吐いた。目元が震えて口元が緩みそうになつている。が、まだ辛うじて引き結ばれたまま。

まだ、何も言わない。手も引き抜かれぬ、視線も逸らせぬ。じつと、見つめられたままだ。

何かの我慢比べみたいにお互い顔色を伺い合っている。間合ひを見計らつて緊張感に笑い出した衝動を押し留めるのが煩わしくて面白い。わざと楽しみを先延ばしにするような、じれたさがくすぐつたくて、口元が笑いそうになるのを我慢している。

その取り繕った余裕の崩れそうな表情。どちらが先に崩れるのか、今か今かと待ちわびて。

たまらない。

「指輪とか……………」

「うん？」

もう片方の手で手の甲をすするりと撫でてみた。ぎりぎりもち肌と本人が自称する通り、触り心地はそこそこ良かった。するすると円を描くように何度も撫ぜる。感触を楽しむ。太子はいたつて気怠げに、かつ普段の軽薄な雰囲気は崩さないままに上目に僕を見続けている。

「ほしいとか、思つたりしますか？」

「妹子は贈つたりしたいと思ふのか？ くれるつていうならもらつておくけど、私きつとすぐに失くしちゃうよ」

「でしようね」

いたつて軽い言葉の応酬。迷いなく答え、軽く喉奥で笑つてやれば一瞬太子がつまらなそうな顔をした。すぐにまたへらへら笑いに置き変わるが、その一瞬の変化を見逃さない。

ゆつたりと微笑んでやつた。何も言わないでいると途端に部屋は静かになる。僕らが黙つてしまつともう、こたつの音かきしらないのだ。こたつはあたたかくてむしろ暑いくらいになつてきた。繫いだままの手がじつとりと汗ばんでくるがそのままにしておく。

何かの我慢比べみたいにお互い顔色を伺い合つて、黙りこ

くつて。

先に折れたのは太子の方だった。

「わかってないかもしれないから一応言っとくけどさあ」

そこにはさつきまでとは違って、はっきりと不機嫌が含まれていた。

「私、例えばお前が指輪とか、そういうものくれたとしてもすぐに失くすって言ってるんだよ」

太子はつまらなそうに、傷付いたとでも言いたげに、僕を睨んでいる。

それでいいの、と挑むように。

私は君が贈る気持ちをすぐに失くしてしまうって言うてるだ。

君は、それでいいのかよ。

ゆつたりと、笑みが唇を吊り上げるのを止められない。我慢しきれなくてはつきりと笑って言うてやった。

残念ながら僕は、そんな安い挑発には乗ってやれない。

「いいですよ、別に」

ゆるゆると手のひらを撫でていた。指の又指をすり付けてわざと、ことさらゆっくりと引き抜いていく。

「忘れられないように何回でも、刻みつけてやりますから」

そつと優しく丁寧に、太子の手のひらに手をそえて軽く持ち上げた。だらりとこたつにもたれていた姿勢をきれいに正して背筋を伸ばす。腰を浮かせて、身乗り出して距離をかせぐ。太子の左手、親指から順番に唇を寄せて口付けていく。ちろりと舌も這わせる。太子の味がする。次の指。

じつと、太子と視線を合っていた。太子は僕の行動に戸惑いながらもまた余裕を取り繕うのがおかしくて微笑ましい。人差し指、中指、薬指、小指。

だから僕も真面目な顔でいる。お互い表情を崩さないように、何かを堪えている。それがわかる。

小指から、また薬指へ。

指先を舌で撫でて、そのままつつ、と伝わせて、そのまま口の中を含む。

ぴくりと太子が指を震わせた。

まだ表情は崩さないものの不安が色濃くておかしくてたまらない。

にやにやと、笑ってしまいそうなのを僕はこらえて、そのまま。

「そんなわけではないでしょう」

心底呆れたように言ってやったら、訳もなくバーカとでも言い出しそうな目で睨まれた。上目遣い、ついでに涙目。

誘われてるならのらなくもないけど、どうやらふつうに噛まれたのが痛かったらしい。

あの後即座に指は引き抜かれた。声にならない悲鳴を上げつつ、ぶんぶんと手を振って。

今は涙目でふーふーと噛まれた部分に息を吹きかけていた。火傷じゃないんだからあまり意味はないと思う。

「妹子に噛まれた……痕になってるし！ ひどいこれ！」

「指輪に見えませんか？」

「はあ？」

勢いよく太子が顔をこつちに向けてきたから、にっこりと微笑んで言ってる。

「失くさないように。忘れないように。ね？」

教え込むように。刻みつけるように。

「何回でも、何回でも。贈り続けたっていいですよ」

「いくら私がおつちりもち肌だからってお餅と間違えて食べようとするなんて！ お前どんだけ飢えてるんだよっ？」

「——ッ！！？」

太子の表情が固まった。

あんたが受け取ってくれるというのなら、こんな風にして何回も。

想いを。

贈り続けたいって思うんですよ。

思っているんです。

そんな、一回や二回、失くされたからってだから何だって言うんですか。

だったらもう一度贈る。

それを失くすならもう一回。

何度も、何度も。

知らなかったでしょう？

太子、僕は、あなたを想っていられるだけでもう十分なんです。

はつきり言って差し上げましょうか。

太子、僕はね。

僕の気持ちが大切で、あなたが大切で、別にあなたから同じ気持ち返って来なくなったら、それでも構わないときえ思っているんですよ。

あんたは手をひっくり返したりして、噛まれた痕をしげし

げと眺めていた。

不機嫌そうに口元が曲がる。

バーカ、と。

他に言葉が思いつかなかったように、しばらく経った後結局そんなことを呟いた。

局そんなことを呟いた。

決して僕を見ようとはしないで。

ぼったりとこたつに突っ伏してもう知らんと言いつつ。

でも丸見えの耳たぶが赤くって思わずかぶりついてやりたくなる。

そしたら今度はどんな反応を見せてくれるだろうか。

想像してみたら楽しくて、実行してみたくなったけど、でも自分から求めるのは何か癪だ。何より普通に仕掛けるのは面白くない。

それでは、さて、どうやってあんたをからかおうかと、僕は次の考えを巡らせた。

それは、さて、どうやってあんたをからかおうかと、僕は

は次の考えを巡らせた。

それは、さて、どうやってあんたをからかおうかと、僕は